

1 7 28
 幼児の教育
 110年の散策

56 109 110

阪神淡路大震災関連の記事から(2)

― 第九十八巻第一号(一九九九年一月)より ―

菊地知子

前号に引き続き、一九九五年から二〇〇〇年にかけて断続的に連載された「震災後の子どもたち」の記事から見えていきたい。私は、自分の身近に、最愛の甥おいを含め幾人か、件の災害直後に生まれた子ども(今や若者)を知っている。生まれる直前に胎内で阪神淡路大震災を経験した彼らは、早ければ来春にして十七歳になって間もない多感な時期に東日本大震災を経験した彼らは、早ければ来春には大学生や社会人になる。今は幼い子どもたちも、あつという間に思春期になり大人になっていく。そういう目で見ると、二〇一二年のこの時を生きている幼子たちがますますいとおしく大切な存在に思えてくる。

以下に、六甲学童保育所どんぐりクラブ指導員の森末哲朗氏による記事を見ていきたい。「震災後の子どもたち」と題する二十四回にわたる連載で、森末氏によるものが六回ある。どの回も捨て難いがここでは主に、森末氏五度目の登場となる「おとなと出会うということ」を見ていく(《》で囲んだ部分は、菊地による要約)。

震災後の子どもたち(2) おとなと出会うということ(一九九九(平成十一)年第九十八巻第一号)

森末哲朗(六甲学童保育所どんぐりクラブ)

《障害者センターで働く古くからの友人が、日ごろ出会う若者の最近の傾向として、「一言で言ったら、あんまり、おとなと出会うていない」という指摘をする。それと重なる話として筆者は、自分が水をこぼしておきながら「おばさん、水がこぼれた」と言いに来た学生がいたという喫茶店のママさんから聞いた話を思い出す。また、どんぐりクラブの活動の中でも、それと重なる体験をしたことを思い出す。》

(前略) そんなわけで、ある意味では最もおとなと出会うことが必要なその時期に、少年はそのことを避けたいと思い、おとなは、かする程度の出会しか持てないでいることがままあるようなのだ。(中略) ところが、あの大地震の混乱の中で、おとなと少年たちとのこうした膠着状態が一挙に突破されたという稀有な体験を、多くの神戸市民は持っている。(中略) 日常を細かく区分けしている垣根が取り払われて、人間と人間との裸の対峙が生まれる。

おとなと出会うとは、そういうことだろうと思う。地震に見舞われて良かったことなど何一つないのだが、敢えて「良かったこと」を挙げれば、普段は見向きもされないチャパツの少年たちが、テント村のおっちゃんやおばちゃん、仮設(住宅)のおじいちゃんやおばあちゃんたちから大いに見直されたことだろう。そのことは少年たちにとっても、自分の生き方を考え直す契機にさえなったわけで、もしあの大地震がなかったらこういう出会いは生まれなかったかもしれない。《大地震に期待をかけるのは意味がないので》もっと日常の中でこれからの十年を考えていくべきだろう。ではどうすればよいのか?

仕事柄なのか、元々のクセなのか、高みに立って「考察」するだけでは気が済まない。かといって、良い知恵も浮かばない。

ただ、もしかするとそのヒントにはなるかなと思えることが、意外にとっても身近な自分の足元にあったのだ。

この夏、(中略) キャンプに出かけた。今年で十一回目。(中略) 子どもは大いに自己主張をし、いさかいを起こし、自分とは異った「他者」を発見して成長して欲しいことには変わりがない。そのためには、子どもたちが自分を磨くための「群れ」の存在がとても大きな意味をもっている。どんぐりには、二十四人の群れがあるのだ。

《すでに十年ほどどんぐりクラブの取材を続けている撮影グループがキャンプに同行、編集の村木さんが子どもたちへのインタビュー後に森末氏にこう言った。》

「森末さん、このキャンプの中で一番おもしろいことはなに？ という質問をしたら、まさひろ(六年生)はどう答えたと思います？」

さてさて、お釜を使って皆んなのために飯たきをすることだろうか？ キャンプファイアーだろうか？ 魚のつかみどりだろうか？ それとも学校的なこと一切から解放されて仲間と過ごすことの総てだろうか？ よく分からない。

「なんやろ？」「それがね、いろんなおとなと会えること、と彼は言ったんです」

あっ、とぼくは絶句してしまった。そして、なるほど、と首肯いた。

七泊八日のキャンプ全体が、一人一人の子どもを生活者として磨くための「教育装置」だということの理解は持っていた。ところが、そのキャンプを支えるために参加するおとなの位置、おとなと子どもとの関係については、こういうことだと明言できる程の理解は持ってい

なかった。子どもを中心に、全日程を支えるためのサポーターという捉え方をばくはしていたようだ。

まさひろの答えを聞いて、「そうだ、子どもたちにとっては、個性豊かなおとなたちとの出会いの場でもあるのだ」ということを、改めて肝に銘じた。

七泊八日の間に子どもたちが出会うおとなの数は、地元のスキー場の皆さんも含めると軽く五十人は超える。子どもに厳しい人もいれば、甘い人もいる。こわいけれど頼りになる人もいる。よく声をかけてくれる人もいれば、無口な人もいる。そうしたおとなたちの間をかいぐりながら、「あのおっちゃんはこのままでなら許してくれる。あのおばちゃんは、そうはいかん」と、子どもたちは自分とおとなの間にある距離を本能的な物指しで計測する。叱られたり誉められたりの経験を繰り返し繰り返し積み重ねることで、子どもたちの思考に「練り」が入る。「世間」に明るくなる。

おとなといえは親と教師くらいしか知らない子どもが増えている時代の中で、厚みのある出会いを楽しみつつ育つ子どもがいるのだ。

そういう場として意識して創った覚えはなかったのだが、一緒に働き、一緒に遊ぶ生活の中でのおとなとの出会いは、とても大切なことを学ぶことのできる場でもあったのだ。

「おばさん水がこぼれたよ」と言った二十歳は、まさひろとは決して重なりはしない。

「震災後の子どもたち」のシリーズの残り5タイトルの他、第二〇一卷第七号の「昼間のきょうだい 夜のきょうだい」も、どんぐりクラブで育ち合う（育ち合った）子どもたちや大人たちのことが書かれている。併せお読みいただきたい。

（お茶の水女子大学）